

## ダニエル書3章の預言的解釈の試み

[ 96 ダニエル書の預言の情報源に関する考察から見えてくる事柄 ] の記事で、ダニエル書全体の預言的な考察を行いました。3章に関しては、その記述に預言的な事を匂わせる表現はなく、当時の出来事を記した忠誠に関する模範的な例として残されたものという見解もありますが、今回は、この記録の預言的な解釈をわたしなりに試みてみたいと思います。

まず、シャデラク、メシャク、アベデネゴという名はよく知られていますが、これはカルデアの風習に因んで勝手に付けられた名前です。

[…ダニエルにはベルテシャザルの名を当て、ハナニヤにはシャデラク、ミシャエルにはメシャク、アザリヤにはアベデネゴの名を当てた。] (ダニエル 1:7)

ここで三人の本来の名、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤ と、その名の意味を銘記しておきたいと思います。

ハナヌヤ： God has favored. 「ヤハウエは恵み深い」「ヤハは親切」

ミシャエル： Who is what God is 「神とは何かと言うものは誰だ」「神である方は誰か」

アザリヤ： Yah has helped, 「ヤハウエは保護者」「ヤハは助けられる」「ヤハは彼を維持される」です。

さてこの三人は、ネスカドネザルの立てた、高さ 600 巾 60 の金の像を拜むよう強制されます。

拒んだ者は、火の燃える炉に投げ込まれると脅されます。

彼らはそれを拒んだため、実際に炉に投げ込まれます。

しかし、天的な保護によって、害を受けずに、そこから出てきます。

預言的な要素としてピックアップできる記述：

600×60 の「像」

火の燃える炉

保護を得て出て来る

聖書の中で、「火」はある場合、精錬すると言う象徴的な意味を持ちます。

[わたしは必ずその三分の一に火の中をくぐらせる。わたしは、銀を精錬するようにして彼らをまさに精錬し、金を調べるようにして彼らを調べる。それはわたしの名を呼び求め、わたしはそれに答える]。(ゼカリヤ 13:9)

大患難も同様に、精錬の目的を持ち、最終的な裁きは「火」「熱」などの語で表されています。

「その同じみ言葉によって、今ある天と地は火のために蓄え置かれており、不敬虔な人々の裁きと滅びの日まで留め置かれているのです。

「…しかし、エホバの日は盗人のように来ます。そのとき天は鋭い音とともに過ぎ去り、諸要素は極度に熱して溶解し、地とその中の業とはあらわにされるでしょう。これらのものはこうしてことごとく溶解するのですから、あなた方は、聖なる行状と敬虔な専心のうちに、エホバの日の臨在を待ち、それをしっかりと思いに留める者となるべきではありませんか。その日に天は燃えて溶解し、諸要素は極度に熱して溶けるのです。」（ペテロ第二 3:10 - 12）

そして、この精錬に関してはダニエル書の中にも同様の記述を見いだせます。

「そして、洞察力のある者たちの中にもつまずかされる者がいる。それらの者のゆえに精錬を行ない、清めを行ない、白くすることを行なうためであり、こうしてついに終わりの時に至る。それはなお定めの際に臨むのである。」（ダニエル 11:35）

「それは、定められた一時、定められた二時、そして半時の間である。聖なる民の力を打ち砕くことが終了するとすぐ、これらのすべての事もその終わりに至る」。…すると彼はさらにこう言った。「行け、ダニエルよ。これらの言葉は終わりの時まで秘められ、封印しておかれるからである。多くの者が身を清め、白くし、練り清められる。」（ダニエル 12:7 - 10）

また、「600×60 の 像」は、黙示録 13章の次の言葉を思い起こさせます。

「…野獣の像をどうしても崇拜しない者たちをみな殺させるようにする…強制して、その右手や額に印を受けさせ、野獣の名もしくはその名の数字を持つ者以外にはだれも売り買いできないようにする。…そう明な者は野獣の数字を計算しなさい。それは人間の数字なのである。そして、その数字は六百六十六である。」（啓示 13:14-18）

ここで、ひとつ思いに留めておきたいのは、この企ての影響を被る対象は全人類であり、条件は、手や額にそのしるし（刻印）を受けると拒むかということであり、そこに、神に対する忠誠や信仰などの要素については何も触れていません。

それで必ずしも「拒む人」が全て、聖書の神に対する崇拜の故にと言うことではなく、各人の宗教的な価値観に基づく決意や、崇拜を強制、強要する国家元首に対する理性的な拒否反応、またその仕打ちに対する自己の主義に反するという表明、あるいは、人間性やその尊厳に対する大義や篤実のゆえに「しるし」を受けようとしらない人など様々な個々の態度が見られるに違いありません。

しかし誰であれ、印を受けさせようとするのを拒むなら、売り買いできない、つまり死活問題に直面し、言わば「火の燃える炉に投げ込まれる」ことになります。

(一応、念のためにここで、補足説明をしておきますと、ある人は、ハルマゲドンで聖書の神を崇拝する人以外は全て滅ぼされると言うようなことを教えられた人がいるかも知れませんが、聖書の示すところによれば、宗教組織は裁かれる事になるかもしれませんが、個々の人の宗教信条のようなものは、強制的に排除されるのではなく尊重され、長い年月の経験により真実を見いだすよう見守れると言えそうです。

そう言える根拠の一つは、千年王国中の出来事に関する描写であると考えられる次の聖句に示されています。

「…彼らはその剣をすきの刃に、その槍を刈り込みばさみに打ち変えなければならなくなる。国民は国民に向かって剣を上げず、彼らはもはや戦いを学ばない。そして彼らはまさに、各々自分のぶどうの木の下、自分のいちじくの木の下に座り、これをおののかせる者はだれもない。万軍のエホバの口がこれを語ったのである。もろもろの民は皆、それぞれ自分たちの神の名によって歩む。しかしわたしたちは、定めのない時に至るまで、まさに永久に、わたしたちの神エホバの名によって歩む。」(ミカ 4:3 - 5)

「末の日」とは千年王国のことである考えられます。なぜなら、「ハルマゲドンを含む「終わりの日」は、諸国が「戦いを学ばない」どころがまったく逆で、その時代は「戦争」一色の時代だからです。

(詳しくは、「79 「末の日」と「終わりの日」の相違点」をご覧ください。)

それで、千年王国中、諸国民は「それぞれ自分たちの神の名によって歩む。」とあり、ハルマゲドンで宗教や個人の信条が強制されることはないことが分かります。)

最後に「ハルマゲドン」を控える「大患難」を含むこの患難期は、70 週の最後の 1 週である全部で 7 年間である事が示されています。

そして、いわゆる「大患難」と呼ばれているのはその後半の三年半の期間のことです。

ところで、聖書には、その大患難から最終的に救われる事になる 3 種類のグループについて記しています。

- A 再接ぎ木されるユダヤ人
- B 真のクリスチャン
- C 「羊とやぎ」の羊とみなされる異邦人

それぞれのグループについてももう少し詳しく説明しましょう。

前半の 3 年半に生来のユダヤ人は、特別処置として、再接ぎ木の機会が与えられます。

「…彼らも、信仰の欠如のうちにとどまっていなければ、接ぎ木されることになるのです。神は彼らを再び接ぎ木することができるからです。というのは、あなたが本来野生のオリーブの木から切り取られ、自然に反して園のオリーブの木に接ぎ木されたのであれば、まして、本来それに属するこれらのものは自らのオリーブの木に接ぎ木されるはずだからです。…すなわち、諸国の人たちが入って来てその人たちの数がそろそろまで、感覚の鈍りがイスラエルに部分的に

生じ、こうして全イスラエルが救われることです。まさに書かれているとおりです。「救出者がシオンから出て、不敬虔な習わしをヤコフから遠ざける。そして、わたしが彼らの罪を取り去る時、これが彼らに対するわたしの契約である」。(ローマ 11:23 - 27)

ここで、「諸国のの人たちが入って来てその人たちの数がそろろう」と訳されている部分は、ギリ語:「フレローマ(FULL, 満了, 完全な補完) エスノス(異邦人)」となっていますので、字義としては「異邦人の完了」というニュアンスです。

それで、艱難期に入った時点で「異邦人からなるクリスチャン」は完成しています。つまり選びは終わっています。

代わって、本来の選びの器であったユダヤ人に再度目が向けられます。

26節の引用文はイザヤ 59:20,21 からの引用ですが、表現が若干違います。

「そして、買い戻す方はシオンに、ヤコフの中の違犯から離れる者たちのもとに必ず来られる」と、エホバはお告げになる。「そしてわたしとしては、これが彼らとのわたしの契約である」と、エホバは言われた。」(イザヤ 59:20 - 21)

「救出者」の部分はイザヤでは「買い戻す方(贖う者)」という表現であり、神ご自身がシオンに来られるというふうになっています。

「こうして全イスラエルが救われる」とパウロは書いていますが、救う方は「違犯から離れる者たちのもとに」こられるわけで、違犯から離れようとしないイスラエルが当然救われる事はないでしょう。

話しがちょっと横道にそれましたが、この「救出者がシオンに来る」というのは、実際に具体的にどのようなようになされるのでしょうか。

そのヒントがダニエル書の中に記されています。

「国民が生じて以来その時まで臨んだことのない苦難の時が必ず臨む。しかしその時、あなたの民、すなわち書に記されている者はみな逃れ出る。また、塵の地に眠る者のうち目を覚ます者が多くいる。この者は定めなく続く命に、…至る。「また、洞察力のある者は大空の輝きのように照り輝く。多くの者を義に導いている者たちは定めのない時に至るまで、まさに永久に星のように輝く。」(ダニエル 12:1 - 3)

「…民のうち洞察力のある者たちは、多くの者に理解を分かち。…(ダニエル 11:33)

「塵の地に眠る者のうち目を覚ます者が多くいる」という表現ですが、ミカエルが立ち上がってサタンが落とされた直後から始まる「艱難期」と同時に文字通りの復活があることは、聖書中の他の記述から言ってあり得ないので、これは比喩的な表現であり、この時、ユダヤ人たちの中に、神の本当の目的、ご意志、キリストの役割など、福音に関連した真理に目覚める者たち

が現れるということでしょう。そして、そうした目覚めた人、洞察力のある人々が、仲間のユダヤ人を義に導き、「不敬虔な習わしをヤコブから遠ざける」事にあずかるということだと考えられます。

次に、大患難から最終的に救われる事になる3種類のグループの二番目「B 真のクリスチャン」についてですが、ほとんどが「異邦人」であり、本来神の選びの器ではなかったのが、イスラエルの「不信仰ゆえの踏み外し」によって折り取られた枝に代わって接ぎ木された野生のオリーブの枝であり、先ほどの表現にあった「異邦人の完成 / 満了」と表現される人々です。

そして三番目の「C 「羊とやぎ」の羊とみなされる異邦人」ですが、この人々はほとんど「異邦人」つまり、非ユダヤ人であり非クリスチャンです。

彼らは、ハルマゲドンの最後に拘束され千年間幽閉される事になるサタンに、もはやそれ以降惑わされることがないように守られる「諸国民」の事です。

「初めからの蛇を捕らえて、千年のあいだ縛った。そして彼を底知れぬ深みに投げ込み、それを閉じて彼の上から封印し、千年が終わるまでもはや諸国民を惑わすことができないようにした。」  
(啓示 20:2 - 3)

つまりは、サタンが千年間縛られる理由は、これまでの悪事に対するお仕置きとしての逮捕監禁というより、ハルマゲドンの後の人々の生活を「もはや惑わす事ができないように」するための処置であるということです。

(この人に関する詳細は「08 来るべき千年王国の下に地上にいる人々」をご覧ください)

先の A 目覚めたユダヤ人 と B クリスチャン は千年間、王として支配するために天の王国に召されますので、その支配を受ける側の人々のことで、彼らは、神の憐れみによって、命を継続します。

ではこれから、この記事の命題であった、これら三グループの救いと、ダニエル3章の記述の預言的解釈の関連を示したいと思います。

改めて、危機から救われた三人のヘブライ人の名前の意味を考えましょう。

ハナヌヤ： God has favored. 「ヤハウエは恵み深い」「ヤハは親切」

ミシャエル： Who is what God is 「神とは何かと言うものは誰だ」「神である方は誰か」

アザリヤ： Yah has helped, 「ヤハウエは保護者」「ヤハは助けられる」「ヤハは彼を維持される」です。

A 再接ぎ木されたユダヤ人は、パウロが「この神聖な奥義」(ローマ 11:25)と呼んでいるように、正に「それはあり得ない」と誰もが思うような特例中の特例であり、この11章の論議

のまとめとして「ああ、神の富と知恵と知識の深さよ。その裁きは何と探りがたく、その道は何とたどりがたいものなのでしょう。「だれがエホバの思いを知るようになり、だれがその助言者となったであろうか」、また、「だれがまず神に与えてその者に報いがされなければならないようにしただろうか」とあるのです。(ローマ 11:33 - 35)

これは正に、神の最大級の憐れみの表明であり、過分のご親切の恩恵であるということです。この時彼らは確かに「ハナヌヤ！」(ヤハウエは恵み深い、ヤハは親切)を経験するでしょう。

B 世界の至る所に存在する異邦人からならクリスチャンは、元々野生のオリーブであったのに、福音が伝えられ、真の神とは誰かを見いだし、その信仰の故に「接ぎ木」されて、「誰も数え尽くすことのできない大群衆」として天の王国で「神聖な奉仕を捧げる」事に与るという報いの故に、自分たちが「ミシャエル！」(神である方は誰か)と問い尋ねる者、あるいは、自分たちこそ(神とは何かと言うものは誰だ)という者であったと言う事を実感するでしょう。

C 「羊とやぎ」の羊とみなされる異邦人は、大患難中保護されて通過し、ハルマゲドンを生き残り、地上に引き続き、生き続けることが許されたことを身をもって知った時、自分たちが「アザリヤ」として(ヤハは保護される)(ヤハは彼を維持される)とされる者の一人になれたことに歓喜することでしょう。